

第四章 薫の物語 薫、浮舟の法事を営む

[第一段 薫、宇治を訪問]

大将殿も、なほ、いとおぼつかなきに、思し余りておはしたり(大将殿もやはり姫の死がととても不審でならないので、思い余って御忌明け前に宇治山荘にお越しなさいました)。道のほどより(山道を来るほどに)、昔の事どもかき集めつつ(昔が思い出されて)、

「いかなる契りにて(どういう因縁で)、この父親王の御もとに来そめけむ(此処の故八宮の御許に通い始めたのだろうか)。かかる思ひかけぬ*果てまで思ひあつかひ(このような意外な人の忌明け法要まで御世話するという)、このゆかりにつけては(この娘御たちには)、ものをのみ思ふよ(悩まされるばかりだ)。いと尊くおはせしあたりに(仏心厚く崇高でいらっしやった八宮の御邸で)、仏をしるべにて(仏のお導きで)、後の世をのみ契りしに(穢れた出生事情の私は善行を積んで私の代で悪運を断ち切り、来世での幸いを祈るばかりの心算だったのに)、心きたなき末の違ひめに(女に迷う末路の未熟さで)、思ひ知らするなめり(私は自分の悪業ぶりを思い知らされているのだろうか)」 *「果て」は<結末>を意味するらしい。ただ、人が死ぬのは「果つ」だが、死去は「果て」ではなく「はかなし」で、「果て」は特に<四十九日、または一周忌の法要>を言うようだ。また、「あつかふ」は<取り扱う。世話する。>で、此処では<法要を執り行う>のだろう。

とぞおぼゆる(とお考えになります)。右近召し出でて(右近を呼び出して)、

「ありけむさまもはかばかしう聞かず(生前の様子も詳しく聞いていない)、なほ(このままではどうしても)、尽きせずあさまじう(いつまでも落ち着かず)、はかなければ(無念なので)、忌の残りもすくなくなりぬ(謹慎期間も残り少なくなつて)、過ぐして、と思ひつれど(忌明け後に訪れようかとは思っていたが)、静めあへずものしつるなり(待ち切れずに来てしまいました)。いかなる*心地にてか(どんな病状で)、はかなくなりたまひにし(姫は亡くなったのですか)」 *「こちち」は<健康状態=病状>。薫大将は姫の死を病死と聞かされていただけだ。右近や侍従は大将に何時、どのように真相を話すかは大問題なのだろう。

と問ひたまふに(と大将がお尋ねになるので)、

「尼君なども、*けしきは見てければ(尼君も姫の失踪騒ぎの様子は見ていたので)、つひに聞きあはせたまはむを(大将殿が結局は姫が病死で無い事をお知りになるのだから)、なかなか隠しても(此処でなまじ隠しても)、こと違ひて聞こえむに(ウソは)、そこなはれぬべし(直ぐにバレるだろう)。あやしきことの筋にこそ(姫と兵部卿の密会のことでは)、虚言も思ひめぐらしつつならひしか(ウソもさんざん吐いて来たが)」 *「けしき」は、姫の失踪当日の失踪発覚時の騒ぎから葬送までの寝殿の様子、を渡り廊下の端の小部屋から窺っていた弁尼が受けた事態の印象、ということなのだろう。ただ、弁尼は呼ばれなければ寝殿には出向かないようにはしていたのだろうが、この山荘に古く住んでいて出入りの者たちや風土慣習の諸事情に明るいし、血縁からしても母君の遠縁であり、格式も母君と同格で、控え目にはしていても、どこかで母君代わりの重しとなる存在として、右近たち上臈から

も一目置かれていたことは確かだ。であれば、弁尼の下女は其相応の権限を許されて寝殿に出入りしていた筈で、当日の動向は勿論、右近たちが隠していた兵部卿宮との仲も下女の調査能力で弁尼に知らされていた可能性は高い。それに加えて、弁尼は対の御方本人やその側近の大輔の君と頻繁に連絡を取る間柄であり、御方がおよその事情を知っているとすれば、それ以上の事情を弁尼は知っている、と見るのが妥当だろう。三章一段に「女君、このことのけしきは、皆見知りたまひてけり」とあったが、女君が「このことのけしき」を知る手づるは、独自に手懐けた女房が常陸姫の社中に居たとしても、やはり最も信頼できる情報筋はこの弁尼だったのでないか。その上に、弁尼は大将殿と旧知であって、大将殿側の事情も含めれば、最も総合的な事情を良く知るのが弁尼のような気さえする。だから私は、右近と侍従の暴走に近い病死処理に、ずっと強引な話し運びを感じていたが、その最大の懸念がこの弁尼の存在だった。いや、もともと失踪騒ぎで事件は知られたのだから、遺体も無いままに火葬するというのは、弁尼どころか他の女房たちの手前でも通らない無理に思えたが、失踪のままでは大掛かりな捜索が始まるのは必至だったし、捜索となれば手掛かりを得る為に背景事情が暴かれるのも必至で、となると姫と宮との密会も公然となり、姫の恥になりかねない、という事も実情ではあったのだろう。だから右近は母君にだけは真相を話して、急な火葬を了承させた。火葬の火で噂の火を消す、みたいな。だから、一時的にでも事態が沈静化さえすれば右近らの企ては効を奏したのである。で、忌明けも間近に、事態は一定の鎮静化は図られたのだろう。病死処理には元々綻びは在ったのであり、右近と侍従は一周忌後を望んだのだろうが、其処まで隠し果せるほど周到なウソでもなく、バレるのは時間の問題だったわけだ。弁尼の登場、といっても実際の登場ではなく此処ではその存在確認だが、は、その時が来た事を読者に知らせる標識みたいなものだ。

かくまめやかなる御けしきにさし向かひきこえては(姫の病死を真摯に痛むこの大将殿に向き合い申しては)、かねて、と言はむ、かく言はむと、まうけし言葉をも忘れ(前以て、ああ言おうこう言おうと用意していた言葉も忘れ)、わづらはしうおぼえければ(右近はウソは吐き切れな思われて)、*ありしさまのことどもを聞こえつ(姫は病死ではなく、恐らく入水なさっての御失踪であるとの、ありのままの事柄をお話し申しました)。*「ありしさま」は、当日の実態を説明した、ということなのだろう。つまり、病死は変死を隠すための偽装工作で、実際には姫は入水自決したらしく遺体も不明だ、という事実。で、追い追い、姫が自決に至る説明として、兵部卿の愛との板ばさみで悩んでいたことも話される、という展開になりそうだ。

[第二段 薫、真相を聞きただす]

あさましう(姫が病死ではなく入水自決したらしいとは、何と悲しい)、思しかけぬ筋なるに(意外な話だったので)、物もとばかりのたまはず(大将は一言も仰れません)。

「さらにあらじとおぼゆるかな(全く信じられないことだ)。なべての人の思ひ言ふことをも(誰もが言い思うにも)、こよなく言少なに(姫はこの上なく慎ましく)、おほどかなりし人は(おっとりしていたというのに)、いかでかさるおどろおどろしきことは思ひ立つべきぞ(どうしてそんなとんでもないことを思い立ったと言うのか)。*いかなるさまに(何処かへ姫を隠して)、この人びと(この女房らは)、もてなして言ふにか(私を騙す心算なのだろうか)」

*「いかなるさまに」は注に<『集成』は「入水ではなくて、匂宮がどこかへ隠しているのではないか、と疑う」と注す。>とある。下文からの逆推でこの文意が取れるが、非常に分かり難い言い方だ。

と御心も乱れまさりたまへど(と大将は困惑なさったが)、「宮も思し嘆きたるけしき、いとしるし(匂宮も姫の死を思い嘆いていらっしゃる様子ははっきり見えているし)、*事のありさまも(此処の様子も)、*しかつれなしづくりたらむけはひは(実は姫は存命で隠れ暮らしているという気配は)、おのづから見えぬべきを(自然に分かるものを)」、*かくおはしましたるにつけても(このように大将殿のご訪問に際しても)、「悲しくいみじきことを(姫の死が悲しく大変なことだと)、上下の人集ひて泣き騒ぐを(山荘の者は上下の別無く皆揃って泣き騒ぐものを)」と、*聞きたまへば(と薫大将は、姫の失踪を実感なさるので)、 *「事のありさまも」は注に<大島本は「ことの」とある。『集成』『完本』は諸本に従って「この」と校訂する。『新大系』は底本のまま「事の」とする。>とある。「諸本」がどういうものか知らないが、此処では私も「諸本」に従いたい。 *「しか(如)」は<もしそのように=実は姫は存命で匂宮が隠れている>。「つれなしづくり」は<平静を装う>だが、此処では<姫が死んだように装う>。 *「かくおはしましたるにつけても」は注に<主語は薫。心中文に語り手の薫に対する敬語が紛れ込んだ表現。>とある。どうもそうらしいが、であれば、心中文括弧の校訂はそうのように此処を外すべきだろう。 *「聞く」は<聞き知る。判断する。考える。>でもあるが、「見る」や「思ふ」の論理考察よりは<味わう。実感する。>という臨場感を示している、のだろう。ただ、分かり難いのは、その薫殿の実感が、姫の不在なのか失踪なのか死なのか、という違いで、その違いが右近への問い詰め方に顕われるのだろうが、この時点では<失踪>として置く。

「*御供に具して失せたる人やある(失踪だとして、姫が供に連れて、誰か居なくなった女房でも居ないのか)。なほ、ありけむさまをたしかに言へ(もっと実態を詳しく話せ)。我をおろかに思ひて背きたまふことは(私を薄情に思つて離反なさることは)、よもあらじとなむ思ふ(決してないと思う)。いかやうなる(どうして)、たちまちに(急に)、言ひ知らぬことありてか(何があつて)、さるわざはしたまはむ(そんなことをなさるのか)。我なむえ信ずまじき(私にはとても信じられない)」 *「おおんともにぐして〜」は注に<以下「え信ずまじき」まで、薫の詞。『集成』は「逃げ隠れているなら、供の女房を連れてくるはず」と注す。>とある。兵部卿宮以外の男の出入りは無い、と大将は踏んでいるだろうから、宮も姫の死を悼んでいるようなので、この時点では、薫大将は<姫の死または失踪>という事態自体は分かっただろう。となると、何故姫は入水することになったのか、が非常に大きな疑問となってくる。「御供に具して失せたる人やある」は<姫が女房を連れて逃げ隠れている>という疑いではなく、それでも良いから生存確認をしたい、という希望から出た言葉と解して置く。つまり、誰も御供に付いた者が居なければ、この時点では理由は分からないが、事実として、いよいよ姫は入水自決したことになる。

とのたまへば(と仰ると)、「いとどしく(病死ではなく入水となれば尚更、疑問が深くなるのは)、さればよ(当然だろう)」とわづらはしくて(と右近は気が重く)、

「おのづから聞こし召しけむ(御承知かとは存じますが)。もとより思すさまならで生ひ出でたまへりし人の(姫君は父宮様にお認め頂けない御不幸な御出生でお育ちなさり)、世離れ

たる御住まひの後は(この宇治住まいとなつてからは)、いつとなくものをのみ思すめりしかど(始終塞ぎがちでいらっしやったようですが)、たまさかにもかく渡りおはしますを(偶にはこうして殿がお見えになるのを)、待ちきこえさせたまふに(お待ち申しなさつて)、もとよりの御身の嘆きをさへ慰めたまひつつ(そうした不幸な境遇を慰めなさつては)、

心のどかなるさまにて(京の落ち着いた暮らしぶり)、時々も見たてまつらせたまふべきやうには(もっと度々殿にお目にかかれるようになるのは)、いつしかとのみ(何時になるのだろうかとばかり)、言に出でてはのたまはねど(言葉にはお出しなさらずとも)、思しわたるめりしを(思い続けていらっしやったようですが)、「心のどかなるさまにて」は、「世離れたる御住まひの後は」に対比させた言い方で、宇治から京へ帰つて<落ち着いた暮らしをして>という意味らしい。分かり難いが、此処が当文の勘所なのだろう。

その御本意かなふべきさまに承ることどもはべりしに(この度の転居のお話で、その念願が適うように承りましたので)、かくてさぶらふ人どもも(此処にお仕え申す女房たちも)、うれしきことに思ひたまへいそぎ(嬉しく存じて引越準備に取り掛かり)、かの*筑波山も(常陸国守夫人である母君も)、からうして心ゆきたるけしきにて(やつと満足なさつた様子で)、渡らせたまはむことをいとなみ思ひたまへしに(姫がお引越なさる準備を甲斐甲斐しくなさつていらっしやいましたが)、*「つくばやま」は注に<浮舟の母。夫が常陸介なのでこう呼ぶ。また「筑波山」は常陸国の歌枕。風情ある言い方。>とある。

心得ぬ御消息はべりけるに(心変わりを責めるような意外な殿の御手紙が姫君にございました上に)、この宿直仕うまつる者どもも(此処の門番の侍たちにも)、女房たちらうがはしかなり(女房たちが男にだらしないうで使者の出入りを厳しく調べるように)、など、戒め仰せらるることなど申して(と、引越を前にして間違いの無いように殿からお達しがあつたと申して)、ものの心得ず荒々しきは田舎人どもの(程度を知らない手荒な田舎武者たちが)、あやしきさまにとりなしきこゆることどもはべりしを(やたらと面倒な手続きを取り成し申すようなこともございましたが)、「心得ぬ御消息はべりけるに」は注に<『完訳』は「納得できぬ文。薫からの「波こゆる一」と心変りを非難された。それが浮舟を一方向的に追いつめた、の気持もこもる」と注す。>とある。注された歌は、浮舟巻六章五段にあつた「波越ゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな(和歌 51-17)」という恋人の心変わりを責めるものだったので、姫は心当たりが無いということにして、宛先間違えでは、とそのまま大将に返却したものだ。が、薫殿が姫にこの歌を贈るには、匂宮と姫が文通をしている確証を得た上でのことであり、いくら右近が「一方向的に追いつめ」られたという筋書きを立てようとしても、薫殿には整然と反論できる自身の目撃があるので、右近は姫と宮の密会を薫殿に隠し果せる筈はなく、せいぜいが姫の苦悩を訴えるに留まる。

その後、久しう御消息などもはべらざりしに(その後は久しく殿のお手紙もございませんでしたので)、*「心憂き身なりとのみ(情けない身の上とばかり)、いはけなかりしほどより思ひ知るを(幼い頃から思い知つて来たが)、人数にいかで見なさむとのみ(一人前に何とか仕立てたいとばかり)、よろづに思ひ扱ひたまふ母君の(いろいろと考え御世話下さる母君

の)、なかなかなることの(期待に沿えず)、人笑はれになりては(世間の笑い者になっては)』、いかに思ひ嘆かむ(どんなに母君が嘆くことだろう)、など*おもむけてなむ(などと、姫君は殿に見限られ申しなさることを畏れているばかりで)、常に嘆きたまひし(いつも嘆いていらっしやいました)。 *「心憂き身なりとのみ」は姫の身の上だろうに敬語遣いが無い。ということは、右近の発言中ながら、姫の内心文が挿入された構文と見る他はなさそうだ。内心文括弧は「いかに思ひ嘆かむ」までが文意上は良さそうだが、「思ひ嘆かむ」が敬語遣いになっていない、というのは母君は話者の右近から見れば目上だが聞き手の殿からは目下だからなのだろう、ので、その前の「人笑はれになりては」で言い差したものと見做す。 *「おもむけてなむ」は<そういう方向にばかり考えて>だろうが、「そういう」とは「久しう御消息などもはべらざりしに」を受けて<殿に見限られる身の上>と姫が自身を思う、ということなのだろう。しかし、何と言うか、ずいぶん長い発言文である上に、かなり分かり難い言い回しだ。当時の読者や聞き手は、是ですんなり理解できたのだろうか。是が当時の現代風な語りだった、ということだろうか。溜息もんだ。

その筋よりほかに(その事以外に)、何事をか(姫がお悩みになる事が、何かあるかと)、思ひたまへ寄るに(考えてみましても)、*堪へはべらずなむ(思い当たりません)。鬼などの隠しきこゆとも(鬼などが隠し去り申すとしても)、*いささか残る所もはべるなるものを(いくらかは生存の望みは残るものでございますが) *「堪ふ(たふ)」は<持ち応える→相当する→該当する>みたいなことだろうか。ただし、この右近の申し立ては虚言八百の出任せであり、直ぐに地金が出るだろうが、それだけに他愛も無い可愛らしさなのかも知れない。それとも、何とか姫の体面を取り繕おうとウソを吐き慣れた右近の哀れさだろうか。 *「いささか残る所もはべるなるものを」は注に<『完訳』は「証拠を残していくもの。入水以外には考えられぬという気持」と注す。「なる」伝聞推定の助動詞。>とある。で、是が、薫殿が「御供に具して失せたる人やある」と尋ねたことに対する、右近の答えなのだろう。殿の鋭い追求を避けようと、少しでも殿に非があるかの予防線を張るべく、ずいぶん長口上の前置きを右近はしたもののだが、この結論こそは事実であり、それだけに説得力があるのだろう。右近の結局の答えは、姫の御供をして姿をくらましたような女房は誰一人としておりません、とは即ち、姫は脱走や失踪などではなく、入水自決したのだ、という宣告だ。

とて、泣くさまもいみじければ(と言って泣く様子も非常に悲しそうなので)、「いかなることにか(本当の事は如何なのか)」と*紛れつる御心も失せて(と薫大将は姫の死が病死ではなく失踪らしいと聞いて、悲しみも紛れるほどに覚えなされた真相に付いての御疑念も忘れて)、せきあへたまはず(本当に姫は入水したのだと知り、涙を堰き止められません)。 *「紛れつる御心」は注に<匂宮が隠しているのではないかと疑って紛らされていた悲しみの気持ち。わずかの希望も消え失せる。>とある。ただ、薫殿は宮の連れ出しは無いと見込んでいて、その他の訳の分からない、どんなとんでもない経緯でも良いから、せめて姫の生存の可能性を期待したが、それを否された、ということなのだろう。

[第三段 薫、匂宮と浮舟の関係を知る]

「我は心に身をもまかせず(私は自由に出歩けず)、顕証なるさまにもてなされたるありさまなれば(目立つ立場にある大将の身分なので)、おぼつかなしと思ふ折も(姫が気懸かりな

時でも)、今近くて(もう少し近くて)、人の心置くまじく(姫が親しめるように)、目やすきさまにもてなして(適当な新居を設けて)、行く末長くを(長く添い遂げよう)、と思ひのどめつつ過ぐしつるを(と逸る気持ちを抑えながら日々を過ごして来たものを)、おろかに見なしたまひつらむこそ(薄情とお思いになるのは)、なかなか*分くる方ありける(むしろ姫の方に二心があった)、とおぼゆれ(と思われます)。 *「分くる方」は<分ける気持=二心>。

今は、かくだに言はじと思へど(今さらは此処まで言う心算はなかったが)、*また人の聞かばこそあらめ(他に人が聞くなれば支障があっても)、宮の御ことよ(それは兵部卿宮のことだ)。いつよりありそめけむ(二人の仲は何時から始まったのか)。さやうなるにつけてや(そういう色事に付いては)、いとかたはに(実に見苦しく)、人の心を惑はしたまふ宮なれば(女の心を惑わしなせる宮なので)、*常にあひ見たてまつらぬ嘆きに(私が邪魔な存在になってしまって、姫は宮にいつもお会い申せない苦しい立場から)、身をも失ひたまへる(自決なされた)、*となむ思ふ(どのように私は思う)。なほ、言へ(はっきり言いなさい)。我には、さらにな隠しそ(私には一切の隠し立てをするな) *「また人の聞かばこそあらめ」の「こそあらめ」の係り結び文型は<ど>が省かれた逆接で、読点でさらに下に続ける息遣いなのだろう。 *「常にあひ見たてまつらぬ嘆きに」の主語と目的語は誰か。「たてまつる」は補助動詞語用では神官王家に対して使われるべき謙譲語だから、主語は姫で目的語は兵部卿宮なのだろう。となると、邪魔者は話者の殿自身という意味になるが、それを明示したものかどうかは悩ましい。が、死因究明に本気である姿勢を示すには明示が効果的かと演出して置く。 *「となむ思ふ」は、以前から、病死だとしても、姫がその事を思い悩んでいた節はあったので、右近との話で姫の自決を知った今、その可能性は直ぐ薫殿の頭に浮かんだのだろう。明察である。

とのたまへば(と大将殿が仰ると)、「たしかにこそは聞きたまひてけれ(殿は確かな証左を聞き知っていらっしゃる)」と、いといとほしくて(と右近はほとんど困って)、

「いと心憂きことを聞こし召しけるにこそははべるなれ(とても嫌な事をお聞きになっていらっしゃるようですが)。右近もさぶらはぬ折ははべらぬものを(私も姫の身近にいて、知らないことはございませんので)」

と眺めやすらひて(と暫く間を置いてから)、

「おのづから聞こし召しけむ(御承知のこととは存じますが)。*この宮の上の御方に(兵部卿宮夫人である二条院の対の御方の所に)、忍びて渡らせたまへりしを(姫が人目を忍んで行っていらっしゃったことがありますが)、あさましく思ひかけぬほどに(宮様が急に思いがけない時に)、入りおはしたりしかど(部屋に入っていたらいらっしゃった際に)、いみじきことを聞こえさせはべりて(姫を女房扱い為さるのはとんでもないと私たちがお止め申しまして)、出でさせたまひにき(宮様は部屋から出て行かれなさいました)。それに懼ぢたまひて(姫はそのことに怖気づきなさって)、かのあやしくはべりし所には渡らせたまへりしなり(あの粗末な三条の隠れ家にお移りになっていらっしゃったのです)。 *「この宮の上の御方」は<二条院の対の御方>だろうが、若君を設けてからは、やはり格が上がったらしく<みやのうへ>と準正室扱いだ。本当に力も無く、血筋も悪い子なら、何処かへ追い出されるか、よほど出来の良い子なら本家に取り上げられる

かするのだろうか、対の御方は親には死に別れていたが、王家筋であり、薫大将が後見であり、匂宮自身もこの人を大事にしたようで、目出度く子の七光りを受けているらしい。

その後(そのまま姫は隠れ住んで)、音にも聞こえじ(噂にも聞かない)、と思してやみにしを(と宮様はお思いになって、言い寄りも止んでいたのですが)、いかでか聞かせたまひけむ(どうして聞き知りなされたのか)、ただ、*この如月ばかりより(ちょうどこの二月から)、訪れきこえたまふべし(この宇治山荘に御手紙を遣わし申しなさいました)。御文は、いとたびたびはべりしかど(宮様からの御手紙は頻繁にございましたが)、御覧じ入るることもはべらざりき(姫君は御覧になることもありませんでした)。いとかたじけなく(それでもあまりに畏れ多く)、うたてあるやうになどぞ(返事を申し上げないのは失礼だと)、右近など聞こえさせしかば(私などがご注意申しまして)、一度二度や聞こえさせたまひけむ(一度か二度はお返事なされたのです)。それより他のことは見たまへず(宮様とのことは、それだけでございます)」 *「このきさらぎばかりより」は注に<『完訳』は「匂宮が浮舟の宇治の住いをかぎつけたのは一月上旬、同月下旬に宇治行を実行。事実を意識的にぼかして過小の言い方をした」と注す。>とある。右近はあくまで受身で、大将の問い詰めに答える立場なので、姫の体面を思えばなるべく事実は隠したいのだから、大将が何処まで知っているのかを探りながら答える、という形になるのだろう。

と聞こえさす(と申し上げます)。

「かうぞ言はむかし(女房なら、こういう言い方になるのだろう)」しひて問はむもいとほしくて(と、これ以上に右近を問い詰めるのも気疲れして)、つくづくとうち眺めつつ(しばらく遠くを見遣ってから)、

宮をめづらしくあはれと思ひきこえても(姫は宮を深く愛しく思い申しても)、わが方をさすがにおろかに思はざりけるほどに(私をさすがに疎かには思えなくて)、いと明らむるところなく(どうして良いか判断がつかず)、はかなげなりし心にて(弱気になって)、この水の近きをたよりにて(此処が水辺である事から)、思ひ寄るなりけむかし(入水自決に思い至ったのだろう)。わがここにさし放ち据ゑざらましかば(私が此処に姫を放って置かなかつたら)、*いみじく憂き世に経とも(どんなに辛い事があっても)、いかでか(如何して古今集歌のように)、かならず深き谷をも求め出でまし(必ずしも身投げをするために深い谷を探すことはなかつたらうに)」 *「いみじく憂き世に経とも～」は注に<『紫明抄』は「世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりけれ」(古今集俳諧、一〇六一、読人しらず)を指摘。>とある。

と(と薫殿は)、「いみじう憂き水の契りかな(全く厭な水との縁だな)」と、この川の疎ましう思さるること(と、この宇治川が疎ましく思えなさること)、いと深し(実に深い)。年ごろ(この何年と)、あはれと思ひそめたりし方にて(深く思い入れて来た所で)、荒き山路を歩き帰りしも(荒い山道を行き来してきたが)、今は、また心憂くて(今は違って気が重く)、この里の名をだにえ聞くまじき心地したまふ(この里の宇治という名前さえ憂とましく思われて聞きたくない気がしなさいます)。

[第四段 薫、宇治の過去を追懐す]

「宮の上の(兵部卿夫人が)、のたまひ始めし(仰い始めた)、*人形とつけそめたりしきへゆゆしう(人形と名付けた事さえ御手洗川の流し雛を思わせて厭わしく)、ただ、わが過ちに失ひつる人なり(正に自分の過失で死なせてしまった人だ)」と思ひもてゆくには(と考えて行くと)、「母のなほ軽びたるほどにて(母親の立場が弱いせいで)、*後の後見もいとあやしく(葬送もひどく風変わりで)、ことそぎてしなしけるなめり(簡略に済ませたらしい)」と心ゆかず思ひつるを(と不可解だったことについても)、詳しく聞きたまふになむ(薫殿は右近に詳しくその事情をお尋ねになって)、*「ひとがた」は注に<「人形」は祓いの後に水に流されもの。>とある。*「のちのうしろみ」は注に<死後の世話、葬送の儀式。>とある。

「いかに思ふらむ(母御はどんな思いだったのだろう)。*さばかりの人の子にては(受領家の子としては)、いとめでたかりし人を(姫はとても優れた人であったのを)、忍びたることは*かならずしもえ知らで(宮との秘めた仲はきっと知らずに)、*わがゆかりにいかなることのありけるならむ(私の正妻からひどい嫌がらせを受けたらしい)、とぞ思ふなるらむかし(と思っているのかも知れない)」*「さばかり」は何を指すのか。今の受領家の身分か、女房上がりの上か、何れ本来は大将が関わる相手ではない、という階級意識らしいが、それでも<あの程度>と言ってしまつては、もっと下級の者が多くいるので、取り敢えず<受領家>として置く。*「かならずしも」は<強ちそうとも限らない>という語用の他に<きつと、恐らくそうだ>という語用もあるらしい。ただ、薫殿の推量とは違って、母君は匂宮の事情は右近から知らされている。でなければ、搜索を断念して、簡素な葬送を了承するわけは無かった。*「わがゆかり」は注に<自分の縁者、薫の正室女二宮の方から何かあったのではないか、と。>とある。母君自身もそういう懸念を持っていたという語り口だったので、従う。

など、よろづにいとほしく思す(などといろいろ同情なさいます)。

*穢らひといふことはあるまじけれど(姫は実は入水だったので、この山荘自体は死の穢れということはないのだろうが)、*御供の人目もあれば(病死と言ひ聞かせている御供の人目もあるので)、昇りたまはで(殿は昇殿なさらず)、*御車の榻を召して(牛車の踏み台に腰掛けて)、妻戸の前にぞあたまひけるも(妻戸の前に座していらっしゃったが)、見苦しければ(いかにも間に合わせのようで、いつまでもそうしていたのでは見苦しいので)、いと茂き木の下に(とても葉が多く茂った木の下に)、苔を御座にて(苔の上を御座所として)、とばかり居たまへり(暫くお休みになります)。*「けがらひ」は注に<浮舟が死んだ場所の穢れ。>とある。入水なので、この山荘自体には穢れがない、ということらしい。*「おおんものひとめ」は注に<世間や供人には病死と言つてある。>とある。病死なら、この山荘で姫が死んだことになって、山荘自体が忌明けまでは立ち入れない場所になる、ということらしい。*「みくるまのしち」は牛車を牛から外して停車する時に柄先を置く台で、乗降の踏み台にもしたとのこと。

「今はここを来て見むことも心憂かるべし(もう今後は此処に来るのも気が進まないだろう)」とのみ(と見納めのように)、見めぐらしたまひて(庭と邸を見回しなさつて)、

「我もまた憂き古里を、荒れはてば誰れ宿り木の蔭をしのばむ」(和歌 52-03)

「もうこれでほんとにこれで おわったか」(意識 52-03)

*注に<薫の独詠歌。八宮、大君、中君に続いて自分薫までが、の意。>とある。「我もまた憂き古里を」は<私までが嫌気して、この宇治山荘を去れば>という筋のようだが、宇治を名前を聞くのさえ嫌気したのは薫殿だけであって、確かに八宮も姉君も中君も常陸姫も宇治山荘を去ったが、嫌って去ったのではない。だから「我もまた」の「また」は「憂し」ではなく、言外の<宇治>や<去る>に掛かっている、むしろこの「また」の二文字が<去れば>の筋を示している、という離れ業だ。いや、しかしこの詠み方は、私には強引に思えて感心できない。ただ、それくらいの無理をしてでも、「荒れはてば誰れ宿り木の蔭をしのばむ」とは詠みたかったのだろう、とは察せられる。というのも、この歌は二年前の秋に宿木巻七章五段で、姉君の形代が中君の他に居る事を弁尼に確認できて、薫殿がもう一花を夢見て詠んだ「宿り木と思ひ出でずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし(和歌 49-16)」と、それに唱和した弁尼の歌「荒れ果つる朽木のもとを宿りきと思ひおきけるほどの悲しさ(和歌 49-17)」とを下敷きにして、此处で終に薫殿の宇治の恋も不毛のまま散り去り、残るは弁尼の「荒れ果つる朽木のもと」にある忌まわしい因縁だけになった、と薫殿が改めて感じ入る場面を作者は演出したかったように思えるからだ。

阿闍梨、今は*律師なりけり(阿闍梨は今は律師になっていました)。召して(薫殿はその者を呼び出して)、この法事のことおきてさせたまふ(姫の忌明け法要の事を取り決めて式を上げさせなさいます)。念仏僧の数添へなどせさせたまふ(念仏僧の数を増やさせなさいます)。「罪いと深かなるわざ(自決は罪障が思い)」と思せば(とお思いになったので)、軽むべきことをぞすべき(その罪を軽減させるべく)、七日七日に経仏供養すべきよしなど(七日ごとに追善供養を上げるようにと)、こまかにのたまひて(細かく指示なさせて)、いと暗うなりぬるに帰りたまふも(だいぶ暗くなった時間にお帰りになるにつけても)、「あらましかば(姫が存命なら)、今宵帰らましやは(今夜帰るなどということはないものを)」とのみなむ(と嘆くばかりです)。*「律師(りっし)」は注に<律師は、僧正、僧都に次ぐ地位。>とある。この僧は冷泉院にも出入りしていて、其処で薫君は八宮の事を聞き知り、宇治へ通い始めたのだった。冷泉院は存命だろうか。冷泉院や薫大将と親交があれば出世は当然だろう。本人は出世に関心は無いのかも知れないが、影響力の増大は利益の増大として喜ぶのだろう。

尼君に消息せさせたまへれど(弁の尼君にも殿は従者をしてご訪問を告げさせなされたが)、

「いともいともゆゆしき身をのみ思ひたまへ沈みて(ともかくも見苦しい身とばかりに存じまして人目を避け)、いとどものも思ひたまへられず(さっぱり世情も分からず)、ほれはべりてなむ(ぼんやりして)、うつぶし臥してはべる(寝ておりますので)」

と聞こえて(と返事申して)、出で来ねば(出て来ないので)、しひても立ち寄りたまはず(強いては立ち寄りなさいません)。

道すがら(殿は帰りの道すがら)、とく迎へ取りたまはずなりにけること悔しう(姫を早く京に迎えなかったことを悔やんで)、水の音の聞こゆる限りは(宇治川の水音が聞こえる間は)、心のみ騒ぎたまひて(心が動揺して)、「骸をだに尋ねず(亡骸すら探さずに)、あさましくてもやみぬるかな(粗末な形で葬ってしまったものだ)。いかなるさまにて(どんな姿で)、いつれの底の*うつせに混じりけむ(何処の川底の貝殻に混じっている事やら)」など、やる方なく思す(などと遣る瀬無く思いなさいます)。 *「うつせ」は「うつせがひ」の略。「うつせ貝」は<肉が抜けて空になった貝殻。>と古語辞典にある。

[第五段 薫、浮舟の母に手紙す]

かの母君は、京に子産むべき娘の事により(かの母君は、京の守邸に出産間近の娘がいたので)、慎み騒げば(死穢が慎まれる安産祈禱の最中だったので)、例の家にもえ行かず(帰宅できず)、すずろなる*旅居のみして(落ち着かない旅寝ばかりで)、思ひ慰む折もなきに(気が晴れる時もなかった)、「また、これもいかならむ(この出産も無事に済むだろうか)」と思へど(と案じたが)、*平らかに産みてけり(難なく出産しました)。ゆゆしければ(しかし、いまだ忌中なので)、え寄らず(守邸には近づけず)、残りの人びとの上もおぼえず(他の子供たちの様子も分からず)、ほれ惑ひて過ぐすに(ぼんやりして日を過ごしている時に)、大将殿より御使忍びてあり(大将殿からの文遣いが人目を忍んで来ました)。ものおぼえぬ心地にも(どういとお手紙かは見当が付きかねたが)、いとうれしくあはれなり(とても嬉しく感じ入りました)。 *「たびあのみして」は注に<『集成』は「三条の小家にでもいるのであろう」と注す。>とある。此処に大将からの使者が来るのだから、同じ三条でもあり、その可能性は高いが、まあ流す。 *「平らかに産みてけり」自体は目出度いことだが、今はまだ姫の忌中なのだから四月中の出産という事に成りそうで、妹姫と左近少将の結婚は昨年八月だから、初夜妊娠でも四月は足掛け9ヶ月で早産なのではないか、などと思つたが、出産予定日が十月十日というのは、目安として妊娠十ヶ月目に入った早い内という意味で、実際には9ヶ月と10日くらいを言うらしく、より正確には妊娠期間は280日・40週とされていて、37週以降の出産は問題が無い場合が多いらしく、現に「平らかに産みてけり」なのだから9ヶ月目の出産で計算は合うようだ。まあ、いくらか早産気味程度か。

「あさましきことは(姫のご不幸に)、まづ聞こえむと思ひたまへしを(直ぐに御見舞申したく存じましたが)、心ものどまらず(私も動揺して)、目もくらき心地して(目が暗む思いで)、まいて*いかなる闇にか惑はれたまふらむと(まして母君のあなた様はどんなに途方に暮れていらっしゃるか、言葉も無く)、そのほどを過ぐしつるに(そのままでいる内に)、はかなくて日ごろも経にけることをなむ(早くも幾日か経ってしまったものです)。世の常なさも(世の無常も)、いとど思ひのどめむ方なくのみはべるを(いっそう身近に感じられますが)、思ひの外にもながらへば(私は不思議と生き永らえておりますので)、過ぎにし名残とは(故人の片割れとして)、かならずさるべきことにも尋ねたまへ(きっと何かの際には御相談下さい)」 *「いかなる闇にか惑はれたまふらむ」は注に<『河海抄』は「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔)を指摘。>とある。

など、こまかに書きたまひて(などを心配りしてお書きになって)、御使には、かの大蔵大輔をぞ賜へりける(御使者には、かの大蔵大輔を遣わしなさいました)。

「心のどこかによろづを思ひつつ(悠長に構えて)、*年ごろにさへなりにけるほど(引越が年を越えることになってしまったのを)、かならずしも心ざしあるやうには見たまはざりけむ(必ずしも私が熱心であるようにはお思いでなかったかもしれません)。されど、今より後(しかし今後は)、何ごとにつけても(すべての追善法要は)、かならず忘れきこえじ(必ず忘れずに勤めます)。また、さやうにを人知れず思ひ置きたまへ(また、私がそのようにあなた様とのご縁を忘れずに居る事を覚えて置いてください)。幼き子どももあなるを(小さい子も居るようですが)、朝廷に仕うまつらむにも(仕官の際には)、かならず後見思ふべくなむ(必ず尽力いたします)」 *「としごろ」は注に<昨秋から今年の四月までの間。浮舟を宇治に置いておいた間。>とある。薫殿が常陸姫を三条の小家から宇治山荘へ移したのは昨年「九月にもありける」(東屋巻六章五段)で、入水は四月の十日に大將が姫を京に移す前に兵部卿宮が姫を浚おうと予定していた今年三月の「かの家主二十八日に下るべし。宮はその夜かならず迎へむ」(浮舟巻七章三段)の直前のことだ。

など、言葉にもものたまへり(などを、使者の口上にも仰いました)。

[第六段 浮舟の母からの返書]

*いたくしも忌むまじき穢らひなれば(姫は病死ではなく入水なので、嚴重に隔離されるほどでもない謹慎であることから)、「深うしも触れはべらず(あなたも御存じのように、私は穢れに深くは触れていませんから)」など言ひなして(と母君は言い含めて)、せめて呼び据ゑたり(強いて仲信を近くへ呼んで殿の御近況などの話を聞きます)。御返り、泣く泣く書く(その後で、御返事を泣きながら書きます)。 *「いたくしも忌むまじき穢らひなれば」は注に<浮舟の死は邸宅内での死ではないので。>とある。病死は疫病の恐れもあるから、実質的に関係者を隔離謹慎させた、ということは普通の経験則にも適う。で、姫は病死ではないから、それほど嚴重な隔離は不要だ、という理屈は成り立ちそう。で、母君は、右近から姫と兵部卿宮との仲を聞かされて、姫がその板ばさみで悩んで入水した、という事情を知っている。薫大將も、ほぼそういうことだろうと理解している。が、薫殿は、母君が其処までの事情を知っている、とは思っていないように語られて来ている。では、薫殿は、母君は姫を病死と思っている、と思っているのだろうか。四段の薫殿の心中文では「忍びたることはかならずしもえ知らで(宮との秘めた仲はきっと知らずに)、わがゆかりにいかなることのありけるならむ(私の正妻からひどい嫌がらせを受けたらしい)、とぞ思ふなるらむかし(と思っているのかも知れない)」と、母君の胸中を慮っていた。つまり母君は、当日の内に現地へ駆けつけて、遺体が無いことで姫が病死ではない事を知り、では失踪かと捜索しようにも、事の秘匿を旨とする右近と侍従の画策で、事件を伏せるための早々の葬送を行なう為に、姫の入水は知らされたが、それは気の迷いだろうと右近に説明され、母君はそれを大將家の嫌がらせに悩んだ結果の気の迷いだろうと類推している、だろうと薫殿は思っている、ということになりそう。となると、薫殿と母君の間では、姫の入水自決は共通認識されているが、その深い理由に付いては互いに触れず、良く分からない突然死ということで話を進める事が無難だという判断が成立しそう。だから、母君が重い穢れでは無いというのは、薫殿本人には通じる。が、従者には、基本的に姫は病死と知らせてあるままなのではないか。であれば、

使者は母君に近づくのを避けるはずで、母君もそれに相応しく対応するだろう。が、この使者は家司の仲信である。殿の腹心であれば、そのくらいの内情に通じていないはずもないし、仲信は内記の道定の養父であり、全ての事情を知る道定から独自の情報を得ている可能性も高く、殿から匂宮の様子を探る相談も受けていたかも知れない。でなければ、このような使者は務まらない。それに、殿の文面にも多分、この使者は姫の入水を承知している、という言割りもあったことだろう。でなければ、この場面は成立しない。だから、仲信は姫が入水したことまでは知っている、と母君も承知している、ということを示す補語で置きたい。

「いみじきことに死なればべらぬ命を(娘に死に後れてまでも死なれずにいるこの命を)、心憂く思うたまへ嘆きはべるに(情けなく存じて嘆いておりましたが)、かかる仰せ言見はべるべかりけるにや(このような殿の有難いお言葉を拝見する為だったのか)、と*なむ(どのように、御手紙を読ませて頂きました)。 *「なむ」は強調の係助詞で、本当にそう思っている、という気持ちを示す言い方なのだろう。「なむ」自体を言い換えれば<~のように>だから、下に「思ふ」のような認識を示す動詞があって当然だが、「む」の助動詞が意思を示しているのです、そのままの言い差しでも文意は伝わる。となると、敢えて文を結ばない方が、その思いが完結せずに現在も進行していることを示せる効果がある。現代語でも言い差しで通用する語は「か。かも。など。とか。」などとかあるが、「なむ」は使われていないので、現代語文としては結びの述辞は明示補語せざるを得ない。

年ごろは(この数年は)、心細きありさまを見たまへながら(娘の頼りない立場を考え申しますにも)、それは数ならぬ身のおこたりに思ひたまへなしつつ(それは情けない我が身の至らなきの所為と思ひ申して来ましたが)、*かたじけなき御一言を(御世話頂けるとの、殿の有難い御言葉を)、行く末長く頼みきこえはべりしに(行く末永くお頼り申し上げておりましたところ)、いふかひなく見たまへ果てては(当の姫が言う甲斐も無く故人に成り果ててしまひましては)、*里の契りもいと心憂く悲しくなむ(宇治という名の土地との縁もまことに憂しく悲しいと、存じられます)。 *「かたじけなきおんひとこと」は注に<薫が浮舟を京の邸に迎えようと言ったこと。>とある。 *「里の契り」は注に<宇治という地名。「憂し」に通じる。>とある。薫殿の文面に「宇治」を「憂し」に掛けた言い回しがあって、それを受けた言い方のように見えるが、その文面自体は不明だ。

さまざまにうれしき仰せ言に(子供たちにも御配慮ある、いろいろと嬉しい御言葉に)、命延びはべりて(寿命も延びまして)、今しばしながらへはべらば(また暫く長生き出来ましたら)、なほ、頼みきこえはべるべきにこそ(ぜひ、仕官の際にはお力添え頂きたい)、と思ひたまふるにつけても(と思ひ申しますにつけても)、目の前の涙にくれて(嬉し涙で字も見えず)、え聞こえさせやらずなむ(御礼の申し上げようもございません)」

など書きたり(などと書きました)。御使に、なべての禄などは*見苦しきほどなり(御使者に通常の褒美を与えるのは不見識となる忌中のことです)。飽かぬ心地もすべければ(それでも母君は何もせずには気が済まないのです)、かの君にたてまつらむと心ざして持たりける(姫君の引越祝いに差し上げようと用意してあった)、よき*班犀の帯(上等なサイの角の石帯や)、太刀のをかしきなど(太刀の美しいものなどを)、袋に入れて、車に乗るほど(袋に入れて、

御使者が帰りの車に乗り込む時に)、 *「見苦しきほどなり」は、喪中の使者には縁起が悪いので褒美の品を出さない、という意味らしい。 *「斑犀の帯(はんさいのおび)」は注に<斑犀の帯、太刀。『集成』は「浮舟にさし上げて、家臣の料などに与えてもらう積りだったのであろう。「斑犀の帯」は、斑文のある犀角を飾りにした石帯。四位五位の束帯に用いる」と注す。>とある。服飾に限らず、当時の生活様式はあまりにも現代と違って、日常生活のことなら様式さえ似ていれば類推もつきそうだが、様式が違うので日常の所作や小物や服装さえほとんど分からない。まして、王朝貴族の儀式・様式などまるで見当が付かない。ただ、もしかしたら当時の平民なら、それに携わる職人でもなければ一生知る事のなかったかも知れない貴族の装束を、資料としてならだが、現代の庶民の私が少しは調べることも出来るのかと、それもウェブなら小手先作業なので、ものの序でに当たってみた。と、「束帯」は当時の貴族の礼装様式の装束で、ざっと黒の袍に白い袴と白い足袋、それに何と言っても頭に飾りの垂尾付きの冠を被り、それと長々と飾りの裾布を後ろに引きずる、という姿は「風俗博物館」サイト他に画像や解説がある。で、その束帯装束に付き物の革ベルトが「石帯(せきたい)」というものらしい。平安装束に付いての説明は「綺陽装束研究所」サイトに詳しくあり、その革ベルトを「石帯」というのは、革ベルト自体は元々大陸由来の騎馬装束だろうか、現代の革ベルトに似通ったものらしいが、そのベルトに宝石を縫い付けて、その宝石の種類や形で階級を示したことによるから、らしい。で、まだら模様のサイの角は四位・五位が使う、ということらしい。といっても、さっぱり実感は持てないが、いくつか束帯装束の画像を見たので、少しは何の話なのかが分かった気になった。

「これは*昔の人の御心ざしなり(これは故人からの御礼です)」 *「昔の人」は<亡くなった人。故人。>という言い方らしい。現世と縁が切れた死んだ人が残したもので、現世に縁ある母君からの贈物ではないので、不吉は及ぼさない、という理屈だろうか。しかし、縁切り期間こそが忌中ではないのか。説得力がある言い方とは思えないが、如何なんだろう。

とて、贈らせてけり(と言って、従者から贈らせました)。

殿に御覽ぜさすれば(使者の仲信が其等の品を殿に御覽に入れると)、

「いと*すぞろなるわざかな(忌中の褒美とは、実に不注意なことだ)」 *「すぞろ」は<何となく。漫然としたさま。気まぐれだ。>でもあり<散漫だ。不注意だ。軽率だ。>でもある、らしい。まあやはり、忌中の褒美は感心しない、ということなのだろう。

とのたまふ(と仰います)。言葉には(仲信の殿への御報告としては)、

「みづから会ひはべりたうびて(母君は自らお会いなさって)、いみじく泣く泣くよろづのことのたまひて(大変に泣きながらいろいろお話しなさり)、幼き者どものことまで仰せられたるが(殿が幼い者のことまでご配慮なさったのを)、いともかしこきに(とても有難く)、また数ならぬほどは(また中央官の仲間入りをしていない地方官の家では)、なかなかいと恥づかしう(大将の口利きは却って気恥ずかしく)、人に何ゆゑなどは知らせはべらで(本人にどういう縁故かは知らせずに)、あやしきさまどもをも皆参らせはべりて(拙い子供たちを皆此方へ参上させて)、さぶらはせむ(修行させたい)、となむものしはべりつる(どのように申しとおりました)」

と聞こゆ(と申し上げます)。

「げに(確かに受領家では)、*ことなることなき*ゆかり睦びにぞあるべけれど(特に気を使わなければならない事もない縁故関係ではありそうだが)、*帝にも、さばかりの人の娘たてまつらずやはある(帝にも受領家の娘がお仕え申しした例はある)。それに、さるべきにて(大体が、縁あって)、時めかし思さむは(帝がお気に入りになる女の出自を)、人の誹るべきことかは(人がとやかく言えるものではない)。ただ人、はた(また、臣下に至っては)、あやしき女(素性の卑しい女や)、*世に古りにたるなどを持ちあるたぐひ多かり(既婚の女を妻にする例は多くある)。*「ことなること」は「殊なること」で<特に重要なこと=特別に目を掛ける必要がある>という意味なのだろう。政府中枢の要人と地方官とでは圧倒的な身分さがある、ということなのだろう。*「ゆかりむつび」は注に<親戚付き合い。>とある。ただ、姫が死んでしまえば、普通はその縁が切れたことになるので、それを特に薫殿は姫と母君に同情して厚遇しようと思っているのだから、むしろこの本文どおりに<縁故関係>くらいに言う方が妥当だ。*「帝にもさばかりの人の娘たてまつらずやはある」は注に<反語表現。受領の娘が後宮に入内した例はある。>とある。受領家の息女は女御や更衣として後宮に部屋を構えることはできないが、尚侍や典侍の高級女官として内侍司に仕えることは出来た、らしい。器量が良ければ、五節の舞姫から帝の眼鏡に適って尚侍に抜擢されることもあったような話がこの物語にも語られていたような気がする。惟光は地方官ではなく参議にもなった中央官だが、光君との乳母子の縁故がなければ地方官にも成りかねない家柄だったかも知れない。その惟光の娘は五節舞姫から尚侍となり、帝ではないが源氏大臣の側室となった。*「世に古りにたる」は注に<いちど結婚したことのある女。>とある。再婚が当時でも珍しくなかったのは、むしろ普通の実情にも思うが、それを特に此处で持ち出すのは、身分差とは違う話題にも見えるが、薫殿が自分の最良を世間体に照らしても、人生いろいろなんだから問題ない、と自分に言い聞かせる為、なのだろうか。

かの守の娘なりけりと(私が面倒見た女が受領家の娘だったと)、人の言ひなさむにも(世間が噂しようとも)、*わがもてなしの(私の処遇がその女を正妻に迎えるなどという)、それに穢るべくありそめたらばこそあらめ(身分秩序に反する罪で名を汚すことであつたのならともかくも、そんなことはしていないのだから)、一人の子をいたづらになして思ふらむ親の心に(一人の子を亡くして悲しむ親の心に)、なほこのゆかりこそおもだたしかりけれ(その子の縁で面目を施すことが出来た)、と思ひ知るばかり(と誇れるように)、用意はかならず見すべきこと(出来るだけのことはしてやりたい)」と思す(とお思いになります)。*「わがもてなしのそれにけがるべくありそめたらばこそあらめ」は注に<『集成』は「浮舟とは正式な結婚をしたわけではないから、女の身分を云々されても、自分の落度にはならない、の意」と注す。>とある。「それにけがる」は<身分秩序に反する罪を犯して名を汚す>ということらしい。上文では、「それ」の比喩が<身分>と言うには曖昧な説明になっていた気がするが、全体で<社会秩序>を言っているようではあり、今でも誰かが責任を取る立場にいないでは組織が動かないので、社会の秩序は階級性によって保たれているが、当時では人の一生を制約する厳然とした身分制度が礼儀様式として明文化されていたのだから、やはり<身分秩序>と言う方が分かり易い気がする。

[第七段 常陸介、浮舟の死を悼む]

*かしこには(母君が滞留している、その三条の小家には)、常陸守、*立ちながら来て(夫の常陸守が、死穢を避けて家に上がらず、様子を見たら引き上げる体で遣って来て)、「*折しも(この大事な出産の時に)、かくてあたまへることなむ(このように忌籠もりなさっているとは、情けない)」と腹立つ(と、姫の急死に腹を立てます)。 *「かしこには」は注に<三条の小家。浮舟母のいる所。>とある。さすがに此处までくると、この「旅居」の場所を<三条の小家>と特定明示せざるを得ないようだ。であるなら、五段の「すずろなる旅居のみして」の注釈にも、下に「かしこ」と特定されるので、この「旅居」は<三条の小家>と目される、と断定しておいても別に支障はないのではないかと。当時は「旅居」という言い方で、この場合では<三条の小家での滞留>が明示された、と理解しても良さそうだ。この物語りに於いて、曖昧な言い方は常であり、この「旅居」という言い方に場所を隠す意図が作者にあったとは思えない。 *「立ちながら来て」は注に<『集成』は「ちょっとやって来て」と訳す。>とある。が、この「立ちながら」は死穢を避けて着座しない、という作法なのではないか。確か、夕顔の死を知人の死と言って出仕しなかった光君を時の頭の中将が見舞った時に、光君の知人の死という話を疑いながらも死穢を避けて「立ちながら」話した場面があった、のが印象深い。ただ、実際に<立ったまま>だったとも思えず、腰を落ち着けずに立話で立ち去る気分で、ちゃんと入室せずに縁側に魔除けの布でも敷いて腰掛けた、くらいのことはしたのではないかと。 *「折しも」は注に<常陸介の詞。娘の出産という重大な時期に、の意。>とある。

*年ごろ(この年またぎの最近は)、いづくになむおはするなど(姫が何処にいらっしゃるとも)、ありのままにも知らせざりければ(母君は夫にありのままを知らせていなかったの)、 *「はかなきさまにておはすらむ(姫は信心籠もりの甲斐無く病死なされた)」と思ひ言ひけるを(と常陸守が思い言うのを)、「京になど迎へたまひて後(大将殿が姫を京に迎えなされた後で)、面目ありて(名誉なことに)、など知らせむ(と子細を夫に知らせよう)」と思ひけるほどに(と北の方は思っていたところに)、かかれば(このように姫が亡くなってしまったので)、今は隠さむもあいなくて(今さらは隠して置く意味も無いので)、*ありしさま泣く泣く語る(姫が宇治で大将殿の御世話になっていた事情を泣く泣く夫に聞かせます)。 *「としごろ」は、姫が二条院からこの小家に移ったことまでは常陸守もさすがに知っていたら、やはり薫殿が宇治へ連れ出した今年の九月から今まで、ということになりそうだ。 *「はかなきさまにておはすらむ」は義父の常陸守が姫の死に至る暮らしぶりを想像して言った言葉のようだ。で、母君は常陸守に「ありのままにも知らせざり」だったのだから、常陸守は姫が大将に囲われている事は勿論、入水自殺である事も知らず、病死したと思っているのだから、北の方が詳しく話さないことから類推すれば、体調を壊して実家筋の何処かの山寺にでも信心籠もりさせていたくらいに思ったのではないだろうか。私には他に考えられない。 *「ありしさま」といっても、何処まで話すのか。姫が大将殿の世話になっていたことは本当に名誉なことだし、宇治行きも隠すことも無いようにさえ思うが、もし常陸守が姫の宇治住まいを知っていたら、此处まで湿っぽい話は作れなかったような気もするが、現に今まで知らなかったというのだから、今こそそれは話すのだろう。それと、姫が病死と言うウソは直ぐにバレそうなので、入水自殺だとも話すだろう。が、兵部卿宮とのことは、母君自身もまだ良く納得できていない部分もありそうで、この時点では恐らく話さないように思える。入水は、それこそ物の怪に祟られた気の迷いで、宇治川に面していた山荘が災いした、とでも言うんじゃないだろうか。

こんなことは先を読み進めば自ずから分かる事だろうが、此処の「ありしさま」を<姫の宇治での暮らしぶり>とだけ言うのは、どうも手応えがない。

大将殿の御文もとり出でて見すれば(北の方は大将殿の御手紙も取り出して見せると)、よき人かしくして(夫の常陸守は、貴人を崇めて)、鄙び、*ものめでする人にて(田舎者めいて、権力者には手放しでへりくだる人なので)、おどろき臆して(驚き恐れて)、うち返しうち返し(何度も御手紙を読み返して)、 *「ものめで」は<褒めること。>と古語辞典にある。「物愛でする人」は<褒める人、煽てる人>で強者に遜る弱者を言う、のだろう。

「いとめでたき御幸ひを捨てて亡せたまひにける人かな(姫は何とも喜ばしい御幸運を捨てて亡くなってしまったものだ)。おのれも殿人にて(私も大将殿の家来として)、参り仕うまつれども(宮邸に参上しては、お仕え申しているが)、近く召し使ふこともなく(近しくご用命を頂戴することなく)、いと気高く思はする殿なり(非常に気品高くお見えになる御方だ)。若き者どものこと仰せられたるは(幼い子供たちを気に懸けてくださったのは)、頼もしきことになむ(頼もしいことだ)」

など、喜ぶを見るにも(などと喜ぶのを見るにつけても)、「まして、おはせましかば(まして姫が生きていらっしゃったなら、どんなに面目を施せたことだろう)」と思ふに(と思うと)、臥しまろびて泣かる(北の方は身をよじって泣き崩れます)。

守も今なむうち泣きける(守も今になって泣きました)。さるは(しかし薫殿は)、おはせし世には(姫の存命中は)、なかなか、*かかるたぐひの人しも(却って守の家族の事はそう熱心には)、*尋ねたまふべきにしもあらずかし(気に懸けなざるわけでもなかったのです)。「わが過ちにて失ひつるもいとほし(自分が宇治の山里に放って置いたという過失で姫を死なせてしまったのが労しい)。慰めむ(せめて母君を慰めよう)」と思すよりなむ(とお思いになったので)、「人の誹り、*ねむごろに尋ねじ(人の非難をいちいち気にしない)」と思しける(とお思いになっていたのです)。 *「かかる類の人」は<姫の家族である、こうした常陸守家の人々>。 *「尋ねたまふべき」の主語は薫殿。「尋ぬ」は<調べる→気に掛ける>。「べし」は当為性を示す助動詞で<そうなるのが普通→普通にそうなる>。 *「ねんごろ」は<手厚く処遇するさま。親しむさま。>を言う語用が多いが、他に<念入りにするさま。熱心なさま。>とかも言うらしい。ただ、此処の「ねむごろにたづねじ」の語用は分かり難い。

[第八段 浮舟四十九日忌の法事]

四十九日のわざなどせさせたまふにも(薫殿は姫の四十九日法要を上げさせなざるにも)、「*いかなりけむことにかは(遺骸が無いので、姫の死は本当のところ、どういう有様だったのかは、よく分からない)」と思せば(とお思いになると)、*とてもかくても罪得まじきことなれば(どういう状態であるにしても、法要を上げて悪いわけではないので)、*いと忍びて(外聞を避けるために、表向きはごく質素に)、かの律師の寺にてせさせたまひける(かの律師の山寺で営ませなさいまして)、六十僧の布施など(六十人の読経僧への布施は)、大きにおき

てられたり(多額を納めなさいました)。母君も来りて(法要には母君も来て参列し)、事ども添へたり(布施も添えました)。*「いかなりけむことにかは」は注に『集成』は「あるいは生きているかもしれない、とも思う」。『完訳』は「遺骸がないだけに不審が残る」と注す。>とある。「遺骸がないだけに」は明示補語すべきだろう。*「とてもかくても」は注に「生きているにせよ亡くなったにせよ、法事は罪障消滅になる。」とある。生死が不明とも言えるだろうが、四段に「骸をだに尋ねずあさましくてもやみぬるかな。いかなるさまにていづれの底のうつせに混じりけむ」という心中文があったので、姫が今現在くどういう哀れな姿でいるにせよ>という死骸の状態を思っているような気もする。だから、どんなに悲惨な姿でいるかもしれないので、より篤く弔いたいと思って「大きにおきてられたり」というのが全体の文意だろう。*「いと忍びて」は恐らくだが、葬送を簡素にした手前、盛大な法要が奇異に見られるのを避けるべく、表向きはくごく質素に>したのだろう。しかし、内実の布施は非常に手厚くしたようだ。

宮よりは、右近がもとに、白銀の壺に黄金入れて賜へり(兵部卿宮からは右近の許に白銀の壺に黄金入れて下されました)。人見とがむばかり大きなるわざは、えしたまはず(人目に立つような大掛かりな寄贈はお出来になれず)、右近が心ざしにてしたりければ(右近からの布施として寺へ納めたので)、心知らぬ人は、「いかで、かくなむ」など言ひける(事情を知らない人は、何故上臆が主人の法要に多額の布施をするのかと不審な声を上げました)。

殿の人ども(大将殿は家人に従う)、睦ましき限りあまた賜へり(親しくしている者の皆を多数参列させなさいました)。「とののひとども」は家臣団の人たちで、大蔵大輔仲信のように家司として側仕えしている腹心の他に、勢力として源氏家に付き従う多くの独立領主たちを言うようだ。下に常陸姫の事を知らない「人のみ多かる」とある。

「あやしく(変だな)。音もせざりつる人の果てを(噂にも聞かなかった人の追善法要を)、かく扱はせたまふ(こんなに立派になさるとは)。誰れならむ(故人はどういう女なのだろう)」

と、今おどろく人のみ多かるに(と、この法要に列席して初めて姫の事を知って驚く人が多い中で)、常陸守来て、主人がり居るなむ(常陸守が来て主たる施主のような顔をしているのを)、あやしと人びと見ける(受領と大将殿がどういう縁故なのかと列席者は不思議に思います)。

*少将の子産ませて(常陸守邸では、左近少将の子が生まれて)、いかめしきことせさせむとまどひ(盛大な出産祝いをしようと準備に右往左往し)、家の内になきものは*すくなく(家の中に無い物は無いようにして)、唐土新羅の飾りをもしつべきに(大陸や半島からの精巧な飾り物の輸入品も置きたいところだが)、限りあれば(貿易管理は国体上の政府権限なので、受領の財力で揃えられる物には限度があつて)、いとあやしかりけり(まがい物ばかりなのでした)。この御法事の(この大将殿主催の御法要は)、忍びたるやうに思したれど(宇治の山寺で人目を忍んで行なう質素なもののお計らいだったが)、けはひこよなきを見るに(実際に居並ぶ僧侶や供物の盛大さを見ると)、「生きたらましかば(姫が存命だったら、この大

将殿の側で暮らして)、わが身を並ぶべくもあらぬ人の御宿世なりけり(私など並び立てないほどの高い身分に着く御運勢だったわけだ)」と思ふ(と常陸守は思います)。*「少将の子産ませて」は注に<左近少将、常陸介の婿。産養いを盛大に行おうとする。>とある。以下、常陸守邸の現状とこの法要を見比べる常陸守の目線の文らしく、左様補語する。*「すくなし」は<物が少ししかない>という状態をいう形容詞語用が普通だろうが、その語用では此处の言い回しは変だ。で、逆に此处の言い回しが普通に聞こえるように「すくなし」の語意を考えてみると<無いようにする>あたりが無難だ。が、「無いようにする」という言い方は動詞表現で、状態自体ではなく作用者を説明することになり、状態説明であろう此处の文意に沿わない。で、「無いようにする」よりは<無いようにしてある>の方が収まる。で、「すくなし」だが、この「すく」は「空く」で、「なし」は補助動詞「做す(そのようにする)」の連用名詞「做し(そのようにすること)」が形容詞化して<そのようにしてあるさま>と語用された、と理屈を捏ねれば、「すくなし」は<無いようにしてある(さま)>で、大体辻褄が合いそうに見える。

宮の上も*誦経したまひ(二条院の兵部卿夫人も読経の布施を贈り)、*七僧の前のことせさせたまひけり(七僧への供膳をさせなさいました)。*「誦経(ずきょう)」は<読経すること>だが、僧に<読経させること>でもあり、その礼に<布施すること>でもあるらしい。匂宮夫人の対の御方は列席したのではなく、布施を贈った、ということらしい。こういう文は、そういう仕来たり・作法・慣習・様式みたいなものを知らないと意味不明だ。*「七僧の前のこと(しちそうのまへのこと)」は注に<【七僧】一法会を行う役僧。講師、読師、呪願、三礼、唄、散花、堂達。>とある。「前の事」は<食事>だが、わざわざこういう言い方をするのだから、普通に食事を用意したのではなく、式次第として様式化した供物膳を義姉として奉納した、ということなのだろう。

今なむ(この法要があったことで)、「かかる人持たまへりけり(大将にはそういう愛人がいたのだ)」と、帝までも聞こし召して(と帝までがお聞き知りなさって)、おろかにもあらざりける人を(其処まで思っていた人を)、宮にかしこまりきこえて(正室の女二の宮に遠慮して)、隠し置きたまひたりける(隠し置いていらっしやったのを)、いとほしと思しける(たいそうな気苦労だったとお思いになりました)。

*二人の人の御心のうち(薫殿と匂宮の二人の御心の内には)、古りず悲しく(姫の死はいつまでも悲しく)、*あやにくなりし御思ひの盛りにかき絶えては(いよいよ横取りの日もせまって波乱を思う緊張が頂点の時に姿が無くなってしまったのでは)、いとみじければ(非常に無念なので)、あだなる御心は(宮の浮気心は)、慰むやなど(却って気晴らしになるかと)、*こころみたまふこともやうやうありけり(他の女に言い寄りなされることもだんだん出てきました)。*「ふたりのひと」は<薫と匂宮。>と注にある。「みこころ」と敬称になっているが、薫殿と匂宮の事を話題にするのも唐突で、いきなり「二人の人」という言い方では分かり難い。*「あやに」は<奇異に>で、此处では<特別な事柄に緊張する>くらいの言い方なのだろう。注には<匂宮についていう。>とある。薫殿にしても、姫の引越は目前だったが、特別な緊張はやはり<横取りのスリル>を言うのだろう。*「こころむ」は<試す>だが、此处では<他の女を試す→口説く>ということらしい。ふむ、逞しい。

かの殿は、かくとりもちて(大将殿はこのように法事を取り持って)、何やかやと思して(何かと常陸守家に気を配り)、残りの人を育ませたまひても(姫を死に追い遣った償いのように、幼い弟妹を自邸に呼んで教育させ為さっても)、なほ、いふかひなきことを(やはり、いつまでも後悔の念を)、忘れがたく思す(忘れられずにいらっしゃいます)。